



## 異国で火事に遭う

神戸大学 経済経営研究所  
准教授 松尾 美和

2010年2月下旬のある寒い木曜の夜、住んでいたアパートが火事で焼けた。アメリカの田舎州の州立大へ助教授として着任して半年。毎日必死で仕事して少しずつ日常生活にも慣れ、寒い冬もピークを過ぎつつある、そんな頃だった。仕事を終えて夜7時ごろ帰途に就くと、遠目にアパートの近くに消防車が止まっているのが見えた。アメリカでは、火災報知機の誤作動およびそれによる消防車の出動はよくあること。赤い光を確認しても特になんとも思わず、手に重いスーパーの買い物袋を提げてぶらぶらと坂道を登って行った。しかし、坂道を登りきってみると何か様子が違う。まず、消防車は一台ではなく二台おり、警察車両も止まっていて、その周りに人だかりができています。人だかりの中心にある方の消防車は…なんと梯子をのぼして放水していた。他にもなく、私の住んでいたアパートの屋根に向かって。ローカルテレビの取材クルーまで来ている。

あれまあ。

なんだか間の抜けた感想だが、ぼかん、とそう思ったことだけ記憶している。事態を把握するには時間がかかった。30分だか1時間だか、しばらく取り巻きの群衆に交じって消火活動を眺めていたが、消火活動は終わりそうにない。近所づきあいもなかったもので、周辺に知り合いがいるわけでもない。仕事をしている人たちに声をかけるのははばかられたが他に手段もなかったため、比較的余裕のありそうな消防士を捕まえて、「あの、私はここの住人なのだけれど、どうなっているの？」と聞いてみた。

「この建物のどこに住んでたの？」

「後ろ側の二階」

「悪いニュースだね。君のところの屋根はないよ」

古い木造民家を改築した安アパートは通りに面した建物から焼け、後ろ半分の増築棟の屋根に燃え移り、そこでようやく消し止められようとしているところだったようだ。彼は「気の毒に」と肩をすくめた後、そこからすぐ近くの商業施設に設けられた仮設の赤十字事務所に行くように私に促した。

周辺警備に来ていた警察に付き添われて赤十字事務所に行くと、事情説明後に歯ブラシなどが入ったアメニティセットと300ドルのプリペイドカードを与えられ、車で10分ほど離れたところにあるモーターの宿泊券をもらった。3泊までは赤十字の補助でそこに泊まれるからその間に何とかしなさい、ということである。そして、翌日に詳細な手続きをするからもう一度この事務所に来るように、と。

手続きの終了後は、消火活動が終わるまで暇だった。時計はまだ8時半。底冷えのする夜で、ぼんやり消火活動を眺めていても寒いだけ。オフィスに戻るほどの元気はなく、近くのモールのホールに、いられるだけいることにした。

消火を待つ間、まず同僚に連絡を入れようとする。携帯電話に入っていた同僚数人の携帯電話に順番にかけてみるが、みんな家では携帯電話を携帯していないのかつかまらない。途方に暮れながら何度もかけなおし、15分ほどたってようやく一人に連絡がついた。家が火事になったこと、明日午前は仕事を休むこと。学科長に連絡しておいてほしいこと。「何かできることは？」と聞いてくれるが、状況が整理できておらず何から頼んでよいかわからない。「今晚泊まる場所はあるから大丈夫、また何かお願いするかもしれない」と言って切る。

(どうも、この時ちょうどローカルテレビのニュースを見ていた学科長夫人が「あれはMiwaの家じゃないかしら」と気づいて、仲の良い事務スタッフの女性に電話して噂していたらしい。数十分後、確認の電話を頂いた。)

ぼんやりと、なくなったかもしれないもの、なくなると困るものについて考える。何より重要なのはノートパソコンだが、幸いつい一週間前にバックアップを取って大学においてあったからデータはほぼ無傷だった。その他は、大抵のものはお金さえ出せば代わりが買える。さて、仕事の合間に家を探し、必需品を買わねばならない。優先順位はどうすればよいか…

気が付くと夜10時が近づき、モールが閉まる時間となった。とぼとぼと家のほうへ歩いていくとすでに消防車は撤収しており、外壁が焦げ屋根のなくなった家が放置されていた。車で指定されたモーターに行こう、と、裏手の駐車場の自分の車に向かう。しかし、ドアを開けようとしても開かなかった。なんと、車にかかった消火の水しぶきが氷点下10℃まで下がった気温によって凍り、ドアが全く開かなくなってしまっていたのだ。更なるトラブルに肩を落としながらタクシーを拾ってモーターに向かい、長い一日を終えた。

持つべきものは、現金と近所の友人。

この火事が教えてくれたことである。

物を持っていてもあっという間に失うことがある。大事だと思って集めていた本なども、大量になくしてしまえば何がなくなったかすら思い出せないものだ。それよりも何かあったときに頼れるのは、数千ドルでも一気に支払えるクレジットカード（と銀行の残高）なのだ。

人間関係では、とにかく物理的に近くにいる人と人間関係を築いておかないといけない。遠くにいても飛んで助けに来てくれる稀有な人間は伴侶くらいなものである。夫には私の分身のように片付けも仕事も何もかもを手伝ってもらったが、それ以外でこういう時に助けてくれるのは、遠くの親友より近くの知り合いだ。実際、同僚や同僚の伴侶たちが家探しや買い物や事務手続きを助けてくれ、少し離れてはいるものの在米の他都市の友人がアメリカでは買いにくい日本の物を迅速に送ってくれ、募金までしてくれた。日本にいる親や親友には状況を説明することすら煩わしく、頼れなかったように記憶している。

遠くの親友より近くの知り合い。火事に限らず災害全般に同じことが言えるかと思う。災害に遭わないに越したことはないが、皆様も念のため地縁を大事にされることをお勧めしたい。